コロナ感染記

高校３年　H.K.

1．まえがき

タイトルを見て何故か１つ実験でも研究でもなさそうな記事が混ざっていると思った方、まさにその通りです。去年の自分の記事がただの生物紹介になってしまった反省から、文化祭が終わった頃は「来年こそは何か研究らしい研究をして、灘校生活最後の記事にしよう」と考えていました。

しかし月日が流れるのは早いもので、余裕をもって研究を終わらせておこうと思っているうちに夏休みは終わり、そろそろ始めねばと思っているうちに冬休みも過ぎていきました。そして気づけば冬休み、記事の提出締め切りまでもう数週間となりましたが、僕は実験案すら思いついていませんでした。生物研究部にいながら物理選択の僕にすぐに面白い実験が思いつくはずもなく、しかし何か書かなければいけない、そんな中で思いついたことがありました。

僕は１月末にコロナにかかっていたのです。これに頼ろう。

というわけで、生物研究部での最後の部誌には僕の自宅療養とその後について印象深かった出来事などを、思い出しながらだらだらと書いていきます。コロナに感染してどんな生活になったかを書いた記事なのでこの記事には生物学、疫学的に有益な情報は一切登場しません。既に感染した方も、まだ感染していない方も楽しんで読んでいただければ幸いです。

2．感染判明直前

それは忘れもしない、１月 27 日のことでした。

その日僕はいつも通りに起き、やや体調の悪さを感じながらもおそらく寝不足のせいだろうと思い込み、いつものように学校に向かう電車に乗りました。しかし電車に乗ってすぐに、立っているのがやっとなほどのだるさに襲われました。後から考えると病気としか思えない状態だったのですが、その時はまさか自分がコロナのはずがないという正常性バイアスからでしょうか、寝不足のまま駅まで走ったせいだと結論付けてしまいました。不思議なことに学校まで半分を過ぎるとだるさは嘘のように消え、学校に着いた時にはいつもと全く変わらない体調になっていました。

そして１限の体育が始まったのですが、何か普段と様子が違います。どういう訳か教頭先生が、その後には学年主任までグラウンドに現

れました。この時僕を含む生徒一同はあることを察します。そして案の定、欠席者が多すぎるので学年閉鎖だと伝えられました。そのとき既に中学は閉鎖になっていたので、この日から(当時の)高 3 を除いた全学年が閉鎖となりました。自分も感染しているとは全く思っていなかった僕は、ついに高 2 も学年閉鎖かと思いながら友人と下校したのでした。

3．感染判明

帰宅した後母親と相談し、念のため近所に抗原検査を受けに行こうということになりました。母親は入院中の祖母の着替えを病院まで運ばなければならなかったので、万が一僕がコロナを持ち帰っていると大変だったからです。

もしかすると感染しているかもしれない、と思ったのはこの時になってからでした。一度そう思うと不思議なもので、一気に不安になっていきます。しかし検査に行かない訳にもいかないので、ためらいはあるものの「流石に感染してはいないだろう」と自分に言い聞かせつつ検査を受けることにしました。

検査を受けてしばらく待ってから、母親が検査を担当していた看護師の方に「大丈夫そうですか」と聞くと、「息子さんは大丈夫じゃないですね」という返事が返ってきました。この言葉は一生忘れられないことでしょう。聞いた瞬間やっぱり感染していたか、と思うと同時に、引き返さずに学校に行ってしまったことを深く後悔しました。マスクもしていて距離もとっていたから大丈夫だろうとは思うものの、数時間前まで一緒にいた友人にうつしてしまっていないだろうかと心配になります。結果的には友人は感染せずこの心配は杞憂となりましたが、よく考えると自分はどこでうつされたのかがよくわかりません。普段からマスクはきちんとしていたし、家に帰ればすぐに手洗いうがいにアルコール消毒もしていた上にワクチンだって 2 回打っていたのに、なぜか感染してしまったのです。オミクロン株の感染力に驚くしかありませんでした。

こうして感染が判明した僕は学校や塾に連絡し、いそいそと家に帰ったのでした。ここからは長い引きこもり生活の始まりです。

3．自宅療養

自宅療養と言っても 27 日の時点では母親は感染していなかったため、隔離のために僕は狭い仏間で 10 日間を過ごすことになりました。布団と机だけで部屋の大半が埋まってしまうため、日中は畳 1 枚分程

度の隙間に座って過ごさざるを得なくなり、僕は運動不足解消とエコノミークラス症候群対策のためラジオ体操を日課にしました。

学校が再開されて授業が見られるようになるまでの 7 日間は、だらだらと勉強しつつ、たまに動画を見漁りながら過ぎていきました。その間の数少ない癒しの 1 つが毎日窓際にやってくる野良猫を眺めることで、これは毎日同じ部屋に閉じこもったままのストレスを和らげるのに大いに役立ちました。

部屋の中から見た野良猫

学校が再開されると授業がオンラインで配信されるようになり、1 限までに起きて授業を受けるという生活リズムが生まれました。なおそれまでは寝たくなったら寝て目が覚めたら起きる日々だったので、いくらかは健康的な生活に戻るのかと思いきや、睡眠時間が短くなってしまったので昼間に眠くなるようになってしまいました。家にこもった生活は良くないですね。ちなみに学校に行けるようになると不思議なことに以前と同じ時間に起きられるようになり、我ながら感心しました。

オンラインの授業についてですが、普通に授業をしている教室の黒板をタブレットから配信していたので、画質が悪くて板書の内容が見にくくあまり内容が頭に入らないなというのが正直な感想でした。もちろん何もないよりはある方が良いものの、やはり授業は生で受けるのが一番だなと思います。休み時間にはタブレットを通して友人と話してみたりしたこともあり、これはとても楽しかったです。タブレットを置きっぱなしにしておいてくれた学校、ありがとう。

4．母親感染

僕の感染が確認されてからは母親からは常にドアで閉め切った別室にいることで隔離していましたが、あいにく風呂やトイレや洗面台が何個もあるような豪邸ではないので、水回りはタイミングをずらして使うという、不安感のある隔離となりました。そのこともあってか僕の感染が判明してから 6 日後に喉に異変を感じ翌日検査、その次の日に感染が判明し、幸か不幸か僕の隔離生活は終わりを迎えることとなりました。

困ったことといえば待機期間の計算で、自宅待機のルールがわかりにくかったため、一時は母親の療養期間が終わってから 10 日間の待機

をさせられそうになりました。この計算は保健所に問い合わせた結果誤りだったとわかりました。高校入試の日程上学校に行けるようになるまでの日数は変わりませんでしたが、外に堂々と出られるようになるだけでも気分は晴れ、食材を買いに行けるようになったおかげでご飯も豪華になり、それだけでも十分ありがたかったです。

5．社会復帰とその後

感染判明から 18 日、晴れて自宅待機から解放された僕でしたが、困ったこともありました。学校のプリントは溜まったままになっていましたし、宿題の提出も迫っていました。しかしそんなことはまだましな方で、僕にはより深刻なことがあったのです。

それは、咳が止まらないということです。自宅療養中は症状の 1 つだろうとしか思っていませんでしたが、普通の生活に戻っても収まる気配はなく、病院で薬をもらっても治りません。一時は胸の辺りが痛くなるほどにもなりました。このご時世マスクをしているとはいえ外で咳をするのははばかられますし、周囲の人に不安感を与えかねません。何としてでも治したかったのですが、一向に治らないまま 1 ヵ月が経ちました。このままでは一生咳をし続けることになるのではないかと思った僕は、薬が合っていないのではないかと考え耳鼻咽喉科に行ってみました。

そこで疑われたのは逆流性食道炎でした。もっと大きな理由かと心配していた僕は拍子抜けしてしまいましたが、調べてみるとなるほど、コロナの後遺症の中には逆流性食道炎もよくあるようです。そして処方された薬を飲むこと数週間、もうすぐ感染してから 2 ヵ月になろうという頃に咳はようやく落ち着きました。同じ時期に感染した同級生と比べても一番長く咳をしていただろうと思います。それだけに咳が治った時の喜びはひとしおでした。一生忘れない思い出になるでしょう。こうして僕はコロナの影響から解放されたのでした。

6．おわりに

ここまで僕のコロナに感染してからの出来事を書きましたが、いかがだったでしょうか。僕としては嬉しくはないものの一生の思い出になる体験だったと前向きに考えているのですが、一方で亡くなる方こそ減ったもののまだわからないことも多く、コロナはできればかかりたくはない病気であることに変わりはありません。皆様どうかお気をつけて元気でお過ごしください。拙文ですがここまでお読みいただきありがとうございました。